

編集後記



COVID-19 パンデミックで多くの会議がオンライン開催となり、早3年が経過しました。『精神神経学雑誌』は月に一度編集委員会を開いていますが、ZoomやWebexを用いたオンライン会議に委員も皆すっかり慣れつつあります。オンライン会議は移動の労力が不要で、皆が集まれる広い会議室も必要とせず、個々が職場や自宅で気軽に参加できる点が魅力です。一方で、対面会議で交わされていた四方山話はなかなかしづらくなりました。また、日程調整に幅ができた分、気楽に(?)会議を行いやすくなり、いくつかの会議が続けざまに行われたり、時には重複するなど、明らかに会議の負担は増えているように思います。

すでに案内がありましたのでご存じの方も多いかと思いますが、学会事務局は昨年末に長く使われていた本郷の事務局から御茶ノ水の新事務局へと移転しました。コロナ禍で会議の形が変化し、大人数での対面会議がほとんど行われなくなったことも移転の決め手になったようです。去る4月某日、新年度になり、また著者自身が年初に編集委員長になったばかりということもあり、この新事務局に赴くことにしました。初の訪問となった新事務局は、JR御茶ノ水駅から徒歩1分と交通至便な場所にあります。福岡から空路で羽田に到着し、そこからのアクセスもモノレールとJR乗り継ぎでたいへんスムーズでした。目の前には東京医科歯科大学と順天堂大学の高層ビルがそびえ立つ一方、新事務局へとつづく神田川沿いの小道には喫茶や食堂、飲食店の入ったテナントビルが建ち並び、土曜日のお昼も多

くの人で賑わっていました。どことなく下町感も漂う風景を見ながら、食い意地のはった著者はつい今度機会があればどのお店に入ろうかとキョロキョロしてしまいました。このような、対面会議の出張先で美味しいものを探すのもオンライン会議にはない楽しみです。

初めて訪れた御茶ノ水の新事務所は新築の瀟洒なビルに入っており、白を基調とした内装の、明るくてきれいな空間でした。前事務局より心持ち狭くなったようですが、大人数での対面会議が行われる機会は今後も少ないでしょうから、十分なのでしょう。今回は、著者と東京在住の編集事務局員、学会事務の方々が現地参加し、編集委員の先生方にはこれまで通りオンラインで参加して頂きました。全員が対面での会議にはもちろん及びませんが、それでも複数名が現地でディスカッションしながら行う会議は、フルオンラインのそれに比べて明らかに会議に熱が入る感覚があります。

コロナ禍のこの3年を振り返ると、会議はもちろんのこと学会や研修会も、対面、オンライン、オンデマンド、あるいはそれらのハイブリッドと、本当に試行錯誤の日々でした。この編集後記が掲載される頃には、いよいよCOVID-19も5類感染症へと移行し、移動や集会に関する制限も解除される見込みです。長かった今回のパンデミックが明けようとするなかで、今後の会議や学会、研修会がどのような形へと変化していくのか興味深いところです。

(中尾智博)